

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2021年09月20日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川陣場下
 41番地 轟オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 専務理事 小原 守夫 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

戦史館会員の皆さま、支援者の皆様、苦難の夏から先行き見えない秋へ、いかがお過ごしでしょうか？ 数十年に一度？の自然災害が毎年各地を襲い、アフガニスタンやミャンマーでは国情が大混乱、百年に一度？のウィルスが世界中に蔓延し、多数の命が危機にさらされ続けています。8月早々に「あかりがはっきり見えた」と言った政治家もいたようですが、先のことは誰も分からない。不安の中でコロナ2年目後半が過ぎていきます。

世界中が困難に見舞われる時代がまさに『有事』であるならば、有事に対応できる国とできない国があって、日本は後者、危機管理能力が改めて問われているようです。戦史館にとって昨年の戦後75年に続き、戦後76年の今年も活動は停滞してしまいました。太平洋戦争開戦80年目の節目という視点から、きちんと戦争の総括をすべき年なのですが、皮肉にもコロナ禍で、当時と同じような社会現象が今も繰り返されている現実から、戦争に突入した頃の社会をふりかえる機会になりました。

コロナ対応をめぐって、戦時中に使われたことばが、今まるで初めてのような感覚で繰り返し使われることに驚いたり、戦争を始めた頃の日本と今の日本を比較して、国の体質は変わっていないのだと実感した方も多いのではありませんか？たとえば『野戦病院』ということば。戦後76年後を経て、ひっ迫したコロナ医療の対策として臨時の大規模施設で治療が受けられるような明るいイメージで軽〜く使われています。冗談じゃない！ 野戦病院は治療の施設ではなかった！ 戦場で動けなくなった兵士が死を待つ場所。パプアニューギニア、ラエの野戦病院、その跡地には無数の日本兵が埋まったままでした。

『自宅療養』と称して自宅待機者の人数が毎日発表されます。ことばが一人歩きして入院前のわずかな待ち時間に少しだけ辛抱すれば明かりが見えそうに聞こえますが、そうではない。かつて満州に取り残され、国家によって見捨てられ切り捨てられ、『棄民』にされた人々の存在を思い起こした人も多いかもしれません。

何回も小出しに繰り返し発出される緊急事態宣言は、地獄の戦場と呼ばれたガダルカナル作戦の再来とメディアで騒がれ、インパール作戦の失敗にも例えられました。兵站(ハタケ)、武器弾薬の補給という後方支援もなく、無謀な精神論で3万人を超す死者を出したインパール作戦を思い起こした人もいます。

国の指導者が反対意見を排除するとトップの耳に心地よい情報だけが集まるんですね。そして結果には誰も責任を取らない。人々に蔓延する「反対できない空気」とか、戦争へ突入した頃の社会と、今目の前で起きている超災害級の出来事に対応できない社会と、何と共通することが多いことか。開戦80年の今こそ、身近な問題として戦争から学ぶ重要性を感じています。一人ひとりの問題として、コロナ禍の対応を教材に、あの戦争を理解するとは皮肉な話ですが、二度の失敗から学ぶ…今まさにその時でしょう。

戦史館を何とか維持できた1年ですが、活動と収支報告は次の頁です。正会員の皆さま同封のはがきに議案Ⅰ、議案Ⅱの承認について可否とご意見を記入し投函お願いします。

特定非営利活動に係る事業会計収支報告書(案)

2020年度特定非営利活動法人太平洋戦史館 2020年8月1日から2021年7月31日まで

21期収支予算(案) 一般会計

2021年8月1日～2022年7月31日まで

科 目 ・ 摘 要		金 額 (単位:円)		金 額	
I 収 入 の 部	1. 会費収入 ()内(解散費)		489,000		420,000
	正 会員[3,000×151] (152名)	453,000		390,000	
	会報会員[1,200×30] (34名)	36,000		30,000	
	賛助会員[30,000×0] (0)	0		0	
	2. 寄附金収入 (1,210,000)	1,112,800	1,112,800	1,200,000	1,200,000
II 支 出 の 部	3. 事業収入(講師・コンサルティング) (417,660)	268,740	268,740	233,363	233,363
	4. 特別会計残から繰入 (200,000)	200,000	200,000	100,000	100,000
	当期収入合計		2,070,540		1,953,363
	1. 事業費		1,069,778		1,080,000
	専従者給与 (600,000)	600,000		600,000	
II 支 出 の 部	旅費交通費 (73,924)	14,460		20,000	
	送料通信費 (194,348)	205,883		200,000	
	出版発行費 (69,300)	83,050		70,000	
	調査研究費 (47,349)	37,523		40,000	
	展示館光熱費 (77,362)	80,590		80,000	
	事務消耗品費 (64,094)	48,272		50,000	
	現地協力費 (0)	0		20,000	
	2. 管理費		779,505		810,000
	会費・会議費 (35,719)	37,800		40,000	
	施設使用料 (600,000)	600,000		600,000	
II 支 出 の 部	管理諸費 (119,250)	149,006		140,000	
	雑費(職費) (24,536)	26,344		30,000	
	租税公課 (0)	0		予備費10,000	10,000
	3. 借入金返済(借入400,000) (400,000)	200,000	200,000	返済 100,000	100,000
当期支出合計		2,082,928		2,000,000	
当期収支差額			▲12,388	▲46,637	
前期繰越収支差額			59,025	46,637	
次期繰越収支差額			46,637		0

議案Ⅰ 2020年度事業と収支報告 議案Ⅱ 2021年度事業計画と収支予算

上の表では文字が小さくて読みにくいと思いますが☆2020年度の特徴は次のとおりです。会員数は数字では前々年とほぼ同じですが年度途中の退会連絡が目立って増えています。収入は前年より25万円以上の減少ですが、その内訳は寄付金が約10万円減少、事業収入も約15万円減少でした。遺骨帰還に備えて毎月、遺骨収集推進協会へ出向いて準備やコンサルティングをしていましたが、コロナ禍で出張回数が減少した結果です。リモートで会議を…と要請されてもなかなか…。一般会計収支の赤字分は特別会計(未送還事業終了後)の残金 320,116円から、2020年度の赤字相当額として20万円を一般会計に充当しました。☆2021年度が8月にスタートしました。今年度の収支計画は、前年より約12万円少ない金額を収入予算としました。会員数の減少、コロナの見通しが立たないことから、事業収入の減少も想定しています。一方の支出予算は、前年同様に最低費用はほぼ固定しているので、これ以上減額できないので実情です。

今年度も設立以来掲げてきた「忘るまじ 語り継ごう次の世代へ プラスの交流を」の活動のスローガンは継続していきます。戦史館が保有する資料や展示物、建物を公的機関

に寄贈して、今後の活動を継承させたいという決意も継続していきます。ただ、一向に寄贈先が見つからない。コロナ禍でますます状況も悪化しているようです。

コロナ禍は日本だけでなく、インドネシアの感染拡大も激しいので、遺骨帰還の見通しは全くたっていません。2019年6月にインドネシアとの遺骨帰還の条約が締結され、その後、派遣の申請、現地への協力要請、考古学者による事前調査、経済協力など長く複雑な手続きを経て、2020年からの遺骨帰還が期待されていましたが、同年1月に厚労省と大使館が「周知活動」で現地に派遣されたものの、協議が混乱してストップしたままです。

「周知活動」の次に続くはずの遺骨収集推進協会による「現地調査」と「遺骨帰還」派遣には、高齢者は外してほしい！！とインドネシア側から言われてしまいました。（岩淵はじめ、戦争で父を亡くした世代なので当然 立派な後期高齢者なんですけどね！）高齢者が多数の戦史館にとって、課題は2015年にアイブラボンディ島・ムサキ島に仮安置したままの日本兵の遺骸 120柱だけは私達の手で、何としても帰還に繋げたい…これだけです。

コロナ禍で現地へ足を運ぶことは叶いませんが、推進協会を窓口にも、現地と様々な手続きを進めながら仮安置費用を現地協力者に送金できたことで、安全な場所に遺骸を移すことができました。前号の戦史館だよりではカフィアールさん（68歳、元ビアク副市長）が撮影した写真と共に「アイブラボンディ島の仮安置遺骸お引っ越し」をお伝えしましたがそのカフィアールさんがコロナウィルスに感染し急死したという知らせが飛び込んできました。パプア州遺骨帰還の現地コーディネーター、ジョコ・スナリョ氏からの8月3日の電話でした。カフィアールさんには長年、遺骨帰還に協力していただいているのでビアク方面へ慰霊巡拝や遺骨帰還に参加された経験のある会員の中にはカフィアールさんをはっきりと覚えている方も多いでしょう。

写真上：イリアンジャヤ州からパプア州へ名前が変わり特別自治州として特権を利用して2003年9月にビアク市の代表団が来日。岩手県で農業はじめ産業技術の習得を目指して県内各地を視察しました。カフィアールさんら一行は平泉の中尊寺を見学し、境内の大木に「ビアクでこんな巨木は見たことがない。」と治山治水の重要性を実感したときの一コマ。

写真下：2014年、アイブラボンディ島とムサキ島の遺骸収容に向けてスピオリ市コリドの船着場で現地スタッフに指示を出すカフィアールさん。日本から持参したレトルトパックのカレーとサトウのごはんを大鍋で温めて、全員で輪になって食事したときのカフィアールさんの満面の笑顔が忘れられない。つい先日も電話とメールで、連絡を取り合ったばかりでした。いつ誰がどこで感染しても不思議でない、先行きが見えない中で新年度ですが戦史館は会員の皆さんの会費とご寄付による支援で維持されています。会員継続可能な方は引き続きご支援お願いいたします。継続困難な方は早めにご一報ください。皆様どうかくれぐれも健康管理に気をつけて、ご自愛を。

